百々裏話(57)

おもてあきら

「多武峰の能―その七―」

◎多武峰と大和猿楽(3)…外山座…

山田猿楽は多武峰附属の猿楽座であったろうとの前回の推測は、外山(宝生)座が多武峰附属であったろうとする香西氏の説を否定することにはならない。なぜなら、多武峰寺附属猿楽座が複数であったことが考えられるからである。

一体、外山座の素姓については、従来定説が無かった。外山の地が初瀬への街道沿いであることから初瀬寺との関係を想像された能勢博士説(『能楽源流考』)、宇陀郡榛原町附近に弘長四年(一二六四)頃には存在していたらしい法性寺に由来するかと疑う永島福太郎氏(『中世文芸の源流』)や川瀬一馬博士(『宝生』昭和37年七月号「とびの中楽座」)の説、山田寺所属とする永島説の別説(『日本歴史叢書』『奈良』)など諸説がありはしたものの、いずれも推測の域を出るものではない。まず初瀬寺の場合は、初瀬与喜天満宮や初瀬滝蔵権現の神主を自称する猿楽大夫がかなり早い頃から居たと見なされること、十二座や金春座がそれと密接な関係を持っていたことなどから、外山座以外の猿楽座が附属していた可能性の方が遥かに高いと思われる。法性寺の場合は、それが南北朝期に実在した形跡が無いことがまず難点である。また、座名としては外山座が古く、宝生座の名は観阿弥の長兄の宝生大夫に始まるらしい点も、外山座が法性寺に由来するわけではないことを思わせる。山田寺説が可能性に乏しいことは、前回の考察からおのずと明らかであろう。

その点、地理的な近接を主たる理由として多武峰附属と見る香西説は、同じ推測ではあっても、かなり可能性に富む説であるように思われる。

外山の地は、現在も桜井市の一部であり、桜井の市街に隣接した所である。そこが多武峰寺最大の寺領であった桜井庄に含まれていたかどうかは明らかでないが、多武峰と密接な関係を持つ地であったことは確実である。『談山神社文書』二三五の、天文十三年奥書の「御供所惣田数帳」には、「外山庄御年貢般若寺ヨリ寄進」と注して、「合八町五反余　九石五斗五升上」とある。外山庄に般若寺の寺領があり、その年貢の一部が多武峰に寄進されていたことが知られるが、この般若寺は、江戸初期に多武峰と京都朝廷との連絡にあたった般若寺秀盛の所属した寺であろうから、真言律宗だった奈良の般若寺ではなくて、多武峰と同じく天台宗に属した京都の般若寺かと思われる。いずれにせよ、右の文書は外山が多武峰に縁の深い地であったことを示す史料と評価してよいであろう。

単に地理的な事情のみならず、後世の宝生座と多武峰の結びつきの強さも、外山座と多武峰の関係の深さを推測せしめる。多武峰で猿楽が演じられたのは、大織冠神像御破裂御平癒祈願勅使下向の際の御馳走能、遷宮使御馳走能などの臨時のものを除くと、既述の維摩八講の際の八講猿楽(10月13・14日)と9月11日の談山社の祭礼、及び9月23日の鎮守一百余所の祭礼の三度であったらしい(『多武峰年中行事』)が、そのうちの談山社の祭礼の猿楽のみは楽頭職が任命され、それは代々宝生大夫が所持していたようである。時代は下るが、宝生大夫忠勝から多武峰寺へあてた元和五年霜月九日付の申状(『談山神社文書』五一三)に、左の如く見える。

今度、多武峰御造宮、従公方様被仰候付、御遷宮之御能拙者被仰付忝奉存候。毎年九月十一日御祭之御能ハ、先々より拙者楽頭にて御座候条、無相違被仰付可被下候。其外御はれつの御能、並御宮移之はつのうの御能ハ、拙者楽頭にて無御座候

条、以来毛頭構申様無御座候、御寺中より被仰付候ハヾ何時も可仕候、自然御屋なく候ハヾ、拙者少も構申間敷候、為後日、如此申上候、仍如件。

「先々より」と言うのをいつ頃からと見なすかが問題であるが、楽頭職はその性格上容易に変更されるものではなかった。猿楽にとっては最も望ましい権限であったからである。反証が無い限り、室町初期以来宝生大夫が談山神社祭礼の楽頭職を保持していたと考えることが許されるであろう。本稿の「その三」に紹介した、宝生座の権守の生一小次郎が多武峰六十六番猿楽の本尊たる翁面を寄進したという話も、室町中期に宝生座が多武峰と特に深い関係にあったことを暗示するかのようである。初代の宝生大夫(観阿弥の長兄)の時から既に外山座が談山社楽頭職を保持していたことも、十分考え得ることである。

前述した地理的条件と、右の宝生大夫談山社楽頭保持の点とを合せ考えると、外山座が多武峰への参勤を重要な仕事として成長した座である可能性は、かなり強いと言えよう。附属という語に限定は必要であろうが、外山座を多武峰附属の猿楽座と推測する香西説に賛成したい。少なくとも、それが宝生座の素姓に関する他の諸説より遥かに有力であることは確かであろう。

前回に山田猿楽(山田座)を多武峰附属と推測し、今回は外山座を同様に考え、複数の座を多武峰付きと想定するわけであるが、両座の間柄について言えば、外山座の方が由緒の古い座ではなかったろうか。前述した後年の宝生座の楽頭職保持がその推定の主たる根拠である。山田猿楽の三兄弟の長男が外山座を嗣いだのも、外山座の方が山田座より格の高い座であれば最も理解し易い。『申楽談儀』が三兄弟に言及するに際し、「宝生大夫嫡子、生市中、観世弟」と、嫡子にのみ大夫号を附している事実は、嫡子が既存の外山座の養子となって宝生大夫と称したとする従来の解釈の他に、嫡子宝生大夫が山田大夫の後継者であり、外山座が山田座の後身であるとの解釈をも可能ならしめる表現であるが、それはともあれ、嫡子宝生大夫の地位が他の二兄弟より高かったことを反映するかの如くであり、それは多武峰参勤猿楽の棟梁格が外山座であったことを暗示してはいないだろうか。

ところで、大和猿楽四座成立以前に多武峰に参勤した猿楽は、外山座・山田座だけであったとは限らない。『申楽談儀』によれば、多武峰八講猿楽には「三頭屋」が設置されており、三人の頭が任命されていたことが知られる。『談山神社文書』二三八の、天正十三年奥書の「御蔵納注文」に、

一、維摩八講頭三人　五十石

とある「維摩八講頭」というのがそれに該当しよう。名称からも、僧侶の中から選ばれて維摩八講全体の総括責任者を勤める役であったと思われる。世阿弥の頃から天正期まで続いていた制度であるから、世阿弥をかなり遡る頃から三人の頭がいたと考えてよかろう。この維摩八講頭に似た例が、春日若宮祭の際に興福寺の僧から選ばれる二名の田楽頭である。参勤する田楽へ装束を下給する役目を負うことからの名称であるが、もともとは若宮祭全般の奉行であったろうと考えられている(永島福太郎氏『奈良文化の伝流』参照)。そして、若宮祭は、二名の田楽頭に対し参勤する田楽は本座・新座の二座であった。このことから、維摩八講会に三人の頭が設置されたのは、参勤する猿楽が三座であったことに由来するのではないかとの推測が浮かび上ってくる。最初から頭三人、猿楽三座であったわけではなく、ある時期にそうであったのが後に制度化してしまったのであろうが、とにかく、世阿弥以前に猿楽三座が参勤する時期があったのではないかと思われる。もしそうであれば、三座はどことどこであったろうか。次回は、その点や、結崎(観世)座と多武峰の関係を考察してみたい。

(43・6・4)